

に於てフミチガイを生ずる何をか當面の蹉過と云ふ、一句合頭の語、切切の繫驢概

既得人身之機要莫虛度光陰保任佛道之要機誰浪
樂石火加以形質如草露運命似電光倏忽便空須臾
卽失

既に人身の機要を得たり、虚しく光陰を度ること莫れ、佛道の要機を保任す、誰か浪りに石火を樂まん、加之ならず形質た草露の如く、運命は電光に似たり、倏忽として便ち空しく須臾に卽ち失す、

此の坐禪儀の末段に至つて無常觀をお説き下されたる承陽大師の御親切は深く感謝せねばならぬ、既に人身の機要を得たり、虚しく光陰を度ること莫れ、機關の機要は肝要の要、宇宙の森々羅々せる萬象中に於て最も肝要なる機關を具へた者は吾人の身體に若く者はない、飛ぶに羽翼がなければ、輕氣球も製れば飛行機もある、驅けるに四足ではないが、汽車も作れば、汽船もある、是等のことが禽獸に優つて居るのみでない、智情意の三つを圓滿にして古今の道を明め、東西の學に通

することの出来るやうに成立つて居るのが吾人の心身である、萬物の靈長と稱するものも強ち自畫自讃でない、斯の如き尊き人身を受け乍ら、徒らに一生涯、糞造器となつて虚しく月日を送ると云ふことは、嘆はしいことである、中には少分の財産を當てにして起きて喰ふて寝て暮せば、安氣だなどと引込思案の者もあれば、又灰吹きと同様にたまるほど穢い根性を持つて、爪で火を燃し、出すことは袖から手を出すのも嫌ひだ、入るとなら夏も御小袖と云ふ様な我利々々亡者にも困る、詰り是等の人々は自己の立場が解らぬのである、人の人たる道を知らぬのである、然らば吾々は如何にすべきか、佛道の要機を保任す誰か浪りに石火を樂まん、卽ち佛道の中に於て最も肝要なる機關を具へたる唯佛與佛の大法を保護擔任すべき大なる責任者であると云ふことを自覺して世を渡るのである、と云ふのは萬事に處する上に於て親しく我物となつて自由に取扱れるやうになればよい、日々の生命を等閑にせず、私に費さぬやうにするのである、故に石と石とを打合せてピカリと出た程の間に生ずる五欲六塵の樂に耽るにはあたらぬ、恰も汚い塵が日光に映じて一寸見ると種々なる美しい色を現すことがある、夫れを好い物の様に思ふて執着

して居ると同然て石火の樂は實に詰らない。加以ならず形質た草露の如く運命は電光に似たり。猶また父母赤白の二滴より出來た六尺足らずの吾人の身體は膝草の葉末に宿れる露よりも脆い。其の間に脚色せられたる幸運であるの非命だのと云ふ一劇は一分に數萬哩を走る電光よりも迅速である。人の一生は浮べる雲の如く。倏忽として空しく須臾に則ち失す。是の萬古不變の一大事實である。これまでは他人の事ぢやと思ふたにおれが死ぬとはこいつたまらんと洒落なる十返舎一九も驚いたさうなが全く無常の風は時を嫌はぬ故に此の無常觀は發菩提心であると同時に究竟涅槃である。學道用心集には誠に夫れ無常を觀する時吾心の心生せず名利の念起らず時光の太だ速かなることを恐怖す。所以に行道は頭燃を救ふ身命の牢からざることを顧眄す。所以に精進は翹足に慣ふ。縦ひ緊那迦陵讚歎の音聲を聞くも夕の風耳を拂ふ。縦ひ毛嬙西施美妙の容顔を見るも朝の露眼を遮る。已に聲色の繫縛を離る自ら道心の理致に合ふかとお示しになつて居るが此の一段と併せて照鑒すべきである。最も無常と云ふたとて只だ悲觀して世を厭ふことでない。小供が青年となり一家の主人となるのも無常なれば、愚者が賢者

になるのも貧棒人が大金持になるのも無常である。要は此の眞理を體得して受け難き人身を受け遇ひ難き佛法に遇たからは聲色の奴婢とならぬ様に綿密なる行持をなすべきである。正法眼藏行持卷には我等の行持に依りて諸佛の行持現成し諸佛大道通達するなり。即ち一日の行持是れ諸佛の種子なりと仰せられた洵に所以あることである。

冀其參禪高流、久習摸象、勿怪眞龍、精進直指端的之道、尊貴絕學無爲之人、合沓佛佛之菩提、嫡嗣祖祖之三昧、久爲恁麼、須是恁麼、寶藏自開、受用如意。

冀くば其れ參禪の高流、久しく摸象に習つて眞龍を怪むこと勿れ直指端的の道に精進し絶學無爲の人を尊貴し、佛々の菩提に合沓し祖々の三昧を嫡嗣せよ、久しく恁麼なることを爲さば須く是れ恁麼なるべし、寶藏自から開けて受用如意ならん。

此一段は勸誡の結文である。冀くは參禪の高流、久しく摸象に習つて眞龍を怪む

こと勿れ承陽大師が法の爲めに手を垂れて懇望せられる趣きがある實に有難
 いことと云はねばならぬ參禪學道に志す者を高流と敬つての御詞である模象と
 は涅槃經にある古事である或る國に鏡面王と云ふ方があつて多くの盲人に象を摸ら
 せた上て象は如何なる者にやと問れると足を持つた者は象は漆桶の如しと云ひ
 尾を持つ者は掃帚の如しと云ひ腹を持つた者は太鼓の如しと云ひ脇を持つ者は
 壁の如しと云ひ背を持つ者は高亢の如しと云ひ耳を持つた者は篋箕の如しと云
 ひ鼻を持つ者は太索の如しと云ふて互に自分の摸つた處を眞物と思ふて大議論
 を王の前で始めたと云ふことであるが會に誇り悟に豊にして小分の智通を得て
 是れを圓滿の大道と思ふてはならぬ佛道は無際涯である故に少し許りのお悟り
 を擔いて騒いで居てはならぬとの御誠めである又眞龍を怪むと云ふことは後漢
 書襄楷の傳に出て居る葉公なる人が大變に龍を好んで居室の中へ龍を彫せたり
 描せたりして喜んで居た夫れを眞實の天龍が聞いて斯程愛して呉れるならお目
 にかゝつてお禮を言ふと頭を觸へ現し長い尾を拖いて座敷へやつて來ると葉公
 之れを見て愕然驚顛して氣絶したと云ふ話がある是れは葉公が眞の龍を愛した

のでなく龍に似て描いた者や彫つた者を好んで居たのである今も夫れで大小顯
 密いろ／＼と議論をしたり亦禪門の中に於ても種々の家風を立て騒ぐが眞實
 なる正傳の佛法只管打坐非思量底の鐵崑崙を丸出しにすれば却つて驚き怪むこ
 とであるうが折角參禪に志した上は直指端的の道に精進し絶學無爲の人を尊
 貴しなればならぬ達摩大師が支那で經論の文字に拘泥し喧々囂々佛法の眞
 意を誤る者の多きを憐れまれて直指人心見性成佛とお示し下された少しも雜り
 毛のない純粹なる直指端的の道に精進するがよい端的是は有り儘の當體と云ふ精
 進は米を搗くに白い處を通り越して青くなるのを云ふたもので大勇猛心を以て
 進むことである永嘉大師は證道歌の中に絶學無爲の閑道人妄想を除かず眞を求
 めずと云れたが我が祖門下の者は斯の如き面目を尊貴せねばならぬ絶學とは學
 門の無いことを云ふのでない學問に礙られぬ人である無爲は何事も爲さぬこと
 てない行爲に滞らぬ人を云ふのである絶學の學問あり無爲の行爲であつて始め
 て佛々の菩提に合查し祖々の三昧を嫡嗣する||とが出来るのである菩提は道
 と譯し三昧は正定と譯す合查は積重の義で嫡嗣は釋迦世尊より迦葉尊者尊者よ

り二十八傳して達磨大師に至り慧可和尚之れを受けられたやうに一器の水を一器に移して嫡々嗣法をするのが我が門の正當恁麼事である其の嫡々嗣法に就て別に秘密の傳授があるかと云ふに血脉と衣鉢とか云ふ者を授與する儀式もあらうが要は只管打坐安樂の法門を打開するに外ならぬ久しく恁麼ならば須く是れ恁麼なるべし恁麼とは支那の俗語て是の如しと云ふ程のことである故に洞山大師は寶鏡三昧の劈頭に如是の法佛祖密に附すと云れた密に附すとは云ふ者の細には無間に入り大には方所を絶すである語らんとすれば口に充ち取らんせば手に滿つるのが如是の法である春花の咲くのも秋紅葉の散るのも如是法の現成である雲居道膺禪師の垂示に體得底の人の心は臘月の扇の如く口邊直に得たり醜の出づることを是れ汝が強いて爲すに非ず任運に此の如し恁麼の事を得んと欲せば須からく是れ恁麼の人なるべし既に恁麼の人何ぞ恁麼の事を愁へんとある四の五の云ふ一切の理窟を打捨て、端坐參禪は佛法の正門なることを信じて真面目に修すれば證自から現はるので、寶藏自から開けて受用如意ならん、寶藏は人々具足個々圓成の者であるから飢へ來れば食し困じ來れば眠る實に

面白い自受用法樂である先にも云へる如く俱胝和尚は凡そ人の問ふあらば常に一指を擧げて吾れ天龍一指頭の禪を得て一生受用不盡と云れた誠に人生五十年七十年は古來稀なりと云ふ寄せては返す波の間に、出來た泡の如き五尺の臭皮袋も直に佛祖の惠命を相續して或は向上或は向下造次にも顛沛にも明珠の盤を走るが如く悉く光明を放つことが出來たならば實に愉快なる人生である、臣となつては忠子となつては孝、各々其本分を盡し職務を勵みて國を守り家を興し以て社會の進歩發展を補け、最尊無上の佛法を護持して行くのが眞の佛教信者と云ふべきである、茲に至れば修證を假り工夫を費す必要はない、道本圓通にして宗乘自在である、然し此の境涯を體得するには坐禪の儀式に依らねばならぬから普くお勧め下されたのである。

普勸坐禪儀講話 畢

大正七年二月十一日印刷
大正七年二月廿八日發行

從容錄講話上下二卷
正價金五圓也

編輯者 兼 禪書刊行會

代表者

久內大賢

東京市深川區御船藏前町三十四番地

印刷人 田村直弼

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷所 國光印刷株式會社

發行所

東京市深川區御船藏前町卅四番地
電話本所二一〇九 振替東京三三五

一喝社



大本山永平寺貫首 日置默仙禪師新著

活禪活話

幀裝最新式
四百有餘頁
正價金壹圓
郵送料八錢

本書は教界の巨人、日置禪師が辛辣の禪機を弄し、懇切の慈訓を垂れて、弘く世道人心に一段の光明を示されたるもの也。佛教の眞理も、禪學の骨髓も、哲學の根柢も、倫理の要義も、皆な活躍して此の中に在り、言言句句一として活社會の活消息に非るはなし、殊に文彩自由、禪味横溢、實に近代稀有の快著といふべし、苟も生存競争の活舞臺に立つて眞の勝利者たらんとするものは先づ本書を讀まざるべからず—唎！。

發行所

東京市深川區御船藏前町卅四番地
電話本所一〇九〇 替振東京三五

一喝社

324
541

8.12.2

終

